スポーツにおける疎外に関する一考察

高 松 昌 宏 (筑波大学大学院)

A Study of Alienation in Sport

Masahiro TAKAMATSU

University of Tsukuba
Doctoral Program
Niihari-gun, Ibaraki (305)

Abstract

Purpose : To analyze the structure of sport in order to clarify how alienation appears in sport since although the concept of alienation has been adopted as a viewpoint to examine sport, the concept has been used in various contexts in this field so far.

Methodology : The following sub-problems were adopted as the necessary steps to follow in the investigation :

1. The concept of alienation, which was mainly based on Marx's concept, was analyzed in order to grasp the concept.
2. The structure of sport was analyzed to examine how the concept of alienation was applicable to the structure.
3. Some external factors of sport, which might cause sportsmen's alienation, were examined.

Results :

1. The concept of alienation has twofold meanings, i.e., alienation as externalization and as estrangement.
2. Sportsmen are alienated from their achievement as the result of their externalization. This form of alienation is affirmative and inevitably arises in sport.
3. Sportsmen are alienated from their records as estrangement as the result of reification. Emphasis of the records may lead this form of alienation into negative one.
4. Achievements under external pressure may cause alienation from man's species being.

はじめに

マルクス (K. Marx) による経済学と哲学に関する草稿が1932年に公開されてから、その草稿における鍵概念ともいえる疎外 (Entfremdung) 概念が注目され、今日に至るまでに様々な研究領域において言及、分析がなされている。スポーツに関する著作もこの例外ではなく、しばしばスポーツが人間に対してもつマイナスの側面を指摘する際に、疎外という言葉が用いられている。しかしながらこれらの多くでは、主にスポーツにおける技術主義^{注1)}やトレーニングの専門化が原因となつて、いわゆる人間性が剝奪されるという意味で疎外が現われると示唆されるにとどまっております、スポーツを行なうこと自体における疎外の有無に関しては述べられていないようである^{注2)}。しかし疎外概念がスポーツ研究の一つの方法となっていることは事実であることから、本研究では、さらに疎外概念を吟味し、方法としての疎外概念をより正確に仕立てあげて、その概念枠組みを通してスポーツを研究しようとするものである。

そこで本研究では、どのような状況が疎外と言えるのかをもう一度確認し、次にスポーツを行なうこと自体に疎外と呼ぶことのできる状況が現われているかどうかを考察することを目的とする。また今日のスポーツが種々の外的な要素とからみ合っていることも事実であることから、この観点からの疎外に関する考察も試みられる。

このための方法としては、最初に疎外の問題を現実社会のなかで分析したと考えられるマルクスを中心に、その労働疎外概念を分析し、そこから得られる疎外の普遍的な概念枠を通してスポーツを見ることによって、その構造に潜んでいる疎外を明らかにするという手順がとられる。

本研究の位置づけ

スポーツにおける疎外と言う場合には、個人がスポーツを行なうこと自体における疎外と、個人とスポーツ組織との間で見られる対立の意味での疎外の二通りが考えられるようである。特に今日

のように国際的な広がりをもつ巨大なスポーツ組織が数多く存在している時代においては、後者の疎外の可能性、つまりそれらの組織が運営するスポーツイベントに参加する人間とその組織との間の対立、たとえば何らかの理由で競技者が彼の所属する組織から追放され、自由にスポーツに参加することができないようになる例などは無視することはできない現象であろう。しかし、すべてのスポーツ組織は個々の人間がスポーツを行うことに基づいており、そこに様々な要因が加わって成立してきたものであり、どのような組織のもとにあるスポーツであっても、人間がある活動を成就達成することには変わりはない。そこで本研究では、個々の人間がスポーツを行なうこと自体に焦点が合わされ、このレベルでの疎外の問題が論じられる。そして本研究の次の段階として、スポーツ組織と個々の競技者との問題が論じられることになると思われる。

研究方法としての疎外概念の把握

マルクスの疎外概念はあまりに有名であるが、その概念形成に大きな影響を与えたのは主にヘーゲル (G. W. F. Hegel) とフォイエルバッハ (L. Feuerbach) と考えられている。ヘーゲルは、主体が自己を外に定立、つまり外化することによって、その外化されたものが独立した存在となって主体に対立する状態となるときを、主体の自己疎外として捉えた^{注3)}。このように捉えられた疎外は一つの運動として見ることもできる^{注4)}。そしてヘーゲルはこの疎外の運動の主体として「神」としても捉えることのできる「精神」を用いた。しかしフォイエルバッハは、この点について抽象的であると批判し、彼は疎外の運動の主体として類的存在^{注5)}、つまり思惟し、愛し、意欲する存在である人間を用いた。マルクスはこのようにヘーゲルによって捉えられた疎外の運動およびフォイエルバッハによる類的存在者としての人間の概念を受け継ぎ、資本主義的生産様式という現実社会の状況のなかでフォイエルバッハがとらえた以上により具体的な、歴史的現実的な人間を主体とした疎外に

について考察したのである^{注6)}。そして彼は労働者がその生産物を通して自己を外化し、その生産物が独立した力として彼自身に対立することから、労働者の生産物からの疎外を明らかにした（疎外の第一形態）^{注7)}。つまり労働者は、労働の実現によって生産物を喪失し、さらに生産物に隷属するのである。またマルクスは労働者の生産行為そのものからの疎外（疎外の第二形態）^{注8)}、類的存在からの疎外（疎外の第三形態）^{注9)}、そして人間からの人間の疎外（疎外の第四形態）^{注10)}をも明らかにした。疎外の第二、三、四の形態は、それぞれ生産行為、類的存在、そして人間から、人間が疎遠になることを意味しており、これらの疎外形態はすべて第一の疎外形態、つまり労働者の自己外化

による生産物からの疎外の必然的帰結として現われると考えられる。なぜなら、生産物はたんに生産活動の要約にすぎないことから、「労働者の生産物が外化であるならば、生産そのものもまた活動的な外化、外化の活動でなければならない」^{注11)}

と捉えられ、したがって労働活動そのものにおける外化、疎外が労働の対象の疎外に要約されているにすぎないと考えられるからである。また、このことは労働が労働者の本質に属しないことを意味している。つまり、労働者は労働のなかでは自己のもとにあると感ずることができず、自由な意識的活動から疎外されているのである。これが疎外の第三形態である類的存在からの疎外であり、このような疎外が現れているということは、ある

図1 労働における疎外の状況

人間が他の人間から、またこれらの個人が人間的
本質から疎外されていることを意味している。し
たがって、人間が他の人間を仲間と感ずるとい
うよりもむしろライバル視するという人間同志の
不和の状態、つまり人間からの人間の疎外を生
み出すのである。このような労働疎外の外的な
要因としては、物象化^{注12)}、商品の物神的性格^{注13)}、
使用価値と交換価値の分離^{注14)}、剰余価値^{注15)}、
そして私有財産^{注16)}が揚げられている。

また、マルクス以降としてマルクーゼ(H. Ma
rcuse)は特に、労働過程における快楽の否定と
いう観点から^{注17)}、そしてフロム(E. Fromm)
は量化、抽象化に注目してそれぞれ労働疎外に
ついて述べている^{注18)}。

以上のような労働における疎外の運動およびそ
の状況から方法的概念枠を導き出すと図1のよ
うに表わされる。

本 論

スポーツにおける疎外の検討

労働における疎外の分析から疎外には大きく2
通りの意味があることが理解されよう。つまり主
体の自己外化による疎外と疎遠の意味での疎外で
ある。したがって、もちろんスポーツの構造と労
働のそれとは同一ではないが、この概念枠を方法
としてスポーツを見ると、その構造のなかにも競
技者の自己外化による対象との対立や、他の要因
による疎遠の意味での対象との対立が見られる。
そこでこれらの観点について以下に考察が進めら
れる。

1) 成就達成に関して

スポーツは組織化され、つまりその活動を規制
する恣意的ではないルールによって治められ、競
争性をもち、身体的能力の表明が要求される活動
として捉えることができよう^{注19)}。スポーツにお
いては、陸上競技で100mを走ったり、スキーで
定められたコースを滑ったりするように、ある活
動が成就達成される。このような成就達成は、画
家が絵を描くことを通して自己を外化するのと同様

に、人間がその活動を行うことを通じて自己外化
することによって現れる。このために、スポーツ
の成就達成は各人各様に現われるのである。この
ような人間の自己外化によって現れる成就達成は、
スポーツでは外化されっぱなしのままの状態にと
どまることはなく、常に独立した存在としてその
達成者に対立している。たとえばスキーでブルー
クボゲンを行っている場合に、ある滑りが左右
均等の弧を描けなかったときには、その人間はそ
の滑りに対して次にはより良い、つまり左右均等
の弧を描くように試みるであろう。また、バスケ
ットボールをしている際に、パスが通らなかったと
き、次の機会にはパスの角度やスピードを変えて
試みるであろう。このようにスポーツの成就達成
はある独立した存在としての人間に対立している
のである。ここには明らかに労働疎外の分析で明
らかにされた疎外の運動が見られる。つまりスポ
ーツでも主体の自己外化したものが独立した存在
としてその主体に対立するのである。したがって、
スポーツにおいて、スポーツをすること自体、す
なわち成就達成から人間は疎外されていると言
えるのである。

2) 記録に関して

スポーツが競争性をもつということから、スポ
ーツの成就達成は他の成就達成と比較されるとい
う現象が見られる。比較の対象となる成就達成は
自己のものと他のものとの両方が考えられるが、
どちらにしても比較する時点では、成就達成は
一つの物として扱われなければならない。なぜなら
「私はこれを行なって、彼はあれを行なった」と
言うだけでは、比較の共通の尺度がないために
比べようがないからである。したがって、スポ
ーツの成就達成は必然的に物象化という過程を経
ることになる。もちろん物象化はスポーツをす
ること自体に対しては外的な要素であるが、ゲー
レン(A. Gehlen)が「成就達成の量化とその測定
はスポーツの本質的なものとなった」^{注20)}と述
べているように現代スポーツに深く関わっている
ものである。すなわち成就達成は時間や得点など
の量として測定され、数字で表現されるという
量化、抽象化の過程を経て、その結果、物とし
て扱われ

るのである。そしてこの物として存在はスポーツにおいては記録と呼ばれ、競技者から離れた存在となり、「100m走で10秒の壁を破る」などと言われるように記録と人間の対立が現れているのである。さらにこの記録は、記録の市場^{注21)}とも呼ぶことのできる場所で他の同様に物象化された記録と比較され、その位置づけがなされるのである。ここではもはや記録はその達成者の手から離れた存在として独自の運動をし、彼に対立するようになる。したがってこれは成就達成と人間の関係のように自己外化による疎外ではないが、物象化という要因によって一つの物として扱われる記録から人間が疎遠になるという意味において疎外の一つの形態として捉えられよう。

また、リガー (B. Rigauer) が「スポーツでは人々はほとんど生産者の個人的質について触れることはなく、9.9秒人間、百万ドル野球選手とか53秒自由型選手などというように呼ぶのである」^{注22)}

と指摘しているように、記録がその達成者の価値をも規定するような現象も見られる。これは人間が自らの手でつくりあげた偶像を人間を越えた存在として捉えて拝むという偶像崇拜と類似している。つまりスポーツでも、人間は記録の価値に服従しているように捉えられるのである。このことから、スポーツの記録もマルクスが分析した商品と同様に物神的性格を帯びていると言えよう。

さらに、オリンピック大会のように高度に制度化が進んだスポーツにおいては、その大会の出場資格が競技者の人間的な質によってではなく、その成就達成の能力、および記録だけで決定されている。たとえば陸上のトラック競技で標準タイムを越えないとその大会に出場できないという事実がこの例である。ここでは、記録と人間の対立は明白である。また、このようなスポーツにおいては、コーチや監督などのように実際にはスポーツの成就達成をすることのない人間も、一競技者の成就達成に欠くことのできない存在として含まれている。このために、一競技者の成就達成はもはや彼一人の関心事にとどまらず、コーチ、監督、さらには観客など、成就達成に対しては外的な人間の関心事となっている。このため、レンク (H. Lenk) が「私の意見としては、これが競技者に

外的に与えられる成就達成への一種の義務感となり、またそれはときには彼の活動を負担に変えるかれしれない唯一の場合であると考えられる」^{注23)}

と述べているように、これらの成就達成に対しては外的な人間がしばしば有能な競技者に対して持つ期待感が、時としてその競技者に成就達成を強制する圧力に変わる可能性のあることは見逃すことはできない。この例は「オリンピックで彼は必ずメダルを獲得するだろう」などと言われたり、メダル獲得がほぼ確実である信じられていた選手が過度の緊張と使命感のために平凡な記録に終わったりする事実に見られよう。もしこのような外的な期待によって競技者が成就達成を強制されているとすれば、彼は人間の類的性格である自由な意識的活動を剝奪されていることになり、したがって類的存在から疎外されることになるのである。

3) 快楽の否定に関して

マルクーゼが労働疎外の要因として揚げた快楽の否定に関連して、スポーツにおいてもその厳格なルールへの服従と記録追及の目標のもとで競技者は快楽を否定されており、したがって一競技者はスポーツを行なうことにおいて疎外されているという見方がある^{注24)}。しかし瀧澤が競技者はルールの規定のもとで平等の立場にあることによってこそ、他のすべての人々と心の底が通じあい、また自分が何の特権ももたないことによって、互いに独立でありながら隔てがなく、深く親しみながらなれあわない、競技の世界に独特なにぎやかさが生まれ得る秘密がある^{注25)}と示唆しているように、ルールへの服従は競技者の快楽の否定につながるというよりもむしろ逆に、その規制の存在こそがスポーツの独特な楽しさを生み出していると考えの方が妥当であろう。また、記録追求という目標に関してバニスター (R. Bannister) が「スポーツマンはたとえチャンピオンになる期待がなくても確かにそのスポーツを楽しむことができる。実際に不成功に終わるスポーツマンが、ある意味ではおそらく真のスポーツマンなのである。なぜなら彼のスポーツへの愛は、スポーツそれ自体にあり、またどんな成功の期待にも汚れないもので

あるから」^{注26)}と述べているように、たとえ記録追求の目標が達せられなくても、また勝利の期待がなくても、そのことが即、快樂の否定につながるとは考えられないと思われる。

以上の考察から得られたスポーツにおける疎外の状況を示すとすれば図2のようになるであろう。

図2 スポーツにおける疎外の状況

まとめ — 疎外の克服に関して

マルクスは労働における克服は、私有財産の止揚によって可能であり、それは共産主義の道をたどることを意味していた。そしてこれによって求めた状況は「労働の疎外の助力で、またその病状のなかで生まれた社会的なもろもろの力が、妨げられずに展開されるために、道が自由にされるということ」^{注27)}であったと捉えられる。すなわち人間が類的存在をおびやかされることなく、自由な意識活動を行なうことができるような状態をめざしていたのである。このことは、マルクスが疎遠の意味における疎外を否定し、自己を外化する運動による疎外を肯定、推進していたことを示していると考えられる。なぜなら外化の運動にともなう疎外は人間が何をつくり出す場合、そしてそれ乗り越えようとするときに必ず生起する現象だからである。

スポーツにおいては、疎外の第一形態、つまり自己外化による成就達成からの疎外と、物象化という要因による疎遠の意味での記録からの疎外が見られることが明らかにされた。さらに、スポーツにおける記録は物神的性格をも帯びているのである。また、スポーツの外部の人間が競技者に対して持つ期待感が、その競技者に成就達成を強制するような圧力の変わる可能性があることも見出された。

成就達成からの疎外は、人間の自己外化の結果と、さらにそれ乗り越えようとする意志によって現われるものであり、いわば肯定的、積極的な疎外と捉えることができる。またこの疎外は人間の類的性格をおびやかすものでもなく、この疎外が現われることにこそ、スポーツの本質があるとも捉えられる。したがって、この疎外形態はスポーツをすることに必然的に生起する現象であると考えられる。

成就達成の比較のために物象化されて物として扱われる記録からの疎外は、記録の更新という意味においては、スポーツの発展に寄与してきたことは事実であろう。つまり、競技者と記録とが対立することによって、競技者はその対立を克服するために技術を高めたり、合理的な動きを見出し

たりしてきたのである。しかしながら、スポーツの成就達成の物象化は、スポーツを行なうこと自体とは異なったレベルで行なわれるものであり、その物象化の結果としての記録と人間の対立が激しいものとなる場合には、前述の技術主義などにむすびつき、否定的な疎外として現われる可能性が大きいことから、記録のみの強調は避けるべきであろう。

また、制度化の進んだオリンピックゲームなどのスポーツの場合には、記録と競技者との対立は明白なものであることが前に述べられたが、この対立が、競技者に対するスポーツの外部の人間の期待の圧力によって、その競技者の自由な意識的活動をもおびやかすまでに強大なものとなる場合には、疎外の第三形態、つまり類的存在からの疎外として現われる危険が大きいことから、これは否定的な疎外として回避されるべきものであると思われる。しかしながら、その疎外に関してはイデオロギーやコマーシャルリズムなどの種々の要因が作用していると考えられることから、これらの観点からの分析をすることがこの疎外形態の克服につながると思われるのである。

注

注1) 永井は「技術主義とは、よい記録や勝利を生み出す運動技術に高い価値を認め、運動成果（勝利、記録など）のみで、運動技術のよしあしまでも評価していく技術重視の傾向である」と述べている。永井康宏、体育原論、不昧堂、1983、p.184

注2) この例として次の文献が揚げられる。・川村英男、体育構造論、体育学論叢（I）、浅井浅一他編、日本辞書、1967、p.23・中村敏雄、近代スポーツの論理、現代スポーツ論序説、シリーズ・スポーツを考える1、影山健他編、3刷、大修館書店、1979、pp.71-75・影山健、現代社会におけるスポーツ、国民スポーツ文化、シリーズ・スポーツを考える2 影山健他編、大修館書店、1972、pp.150-191・永井康宏、前掲書、pp.184-186・丹下保夫、

体育原理(下), 新体育学講座第19巻, 5刷, 逍遙書院, 1968, pp. 60-132・Rigauer, B. Sport and Work. Trans. A. Guttman. New York: Columbia University Press, 1981, p. 72・Brohm, Jean-Marie, Sport: A Prison of Measured Time. Trans. I. Fraser., London: Ink Links. 1978, p. 63

注3) ヘーゲル全集5, 精神の現象学 下巻, 金子武蔵訳, 岩波書店, 1979, pp. 785-897

注4) 城塚登「対立と統一, 多様と唯一といった矛盾した関係が成り立つものも統一的な主体がみずからを否定して統一へと還帰するという運動を行なうからにはかならない」と述べている。城塚登, 新人間主義の哲学—疎外の克服は可能か—, 14刷, NHKブックス, 1982, p. 63

注5) 人間は動物と異なり, 自己の類をも対象とすることができ, 個人としては有限な人間も類としては無限であり, 完全であるとフョエルバッハは考えていた。L. フョエルバッハ, キリスト教の本質(上), 船山信一訳, 38刷, 岩波書店, 1982, pp. 48-50

注6) フョエルバッハは一般に人間というものは類的なものだと述べるのみで, 現実の歴史的な社会に生きる人間の類的存在がどのようになっているかを具体的に捉えないために, 現存の個別な人間がどのような状態に陥っているかについては具体的に答えられなかったが, マルクスは類的存在者である人間という概念を現実社会のなかで用いてその状況を分析している。同上, pp. 47-102およびK. マルクス, 経済学・哲学草稿, 城塚登・田中吉六訳, 22刷, 1983, pp. 84-106

注7) K. マルクス, 同上, pp. 86-90

注8) 労働が労働者にとって外的であり, 労働が労働者の本質に属さないことを意味する。このような労働では「労働者の自由な肉体的および精神的エネルギーがまったく発展させられずに, かえって彼の肉体は消耗し, 彼の精神は退廃化する」のである。同上, p. 91

注9) これは生産物からの疎外と生産行為そのものからの疎外の統合として現われる。自由な

意識的活動, つまり人間の類的性格が単なる生活手段になりさがってしまい, 人間の生活が動物のそれと同等のものになってしまう。このために類的存在が疎遠なものになるのである。同上, pp. 84-106

注10) 類的存在からの疎外の必然的帰結として現われるものである。つまり個々の人間が類的存在から疎外されているということは, 人間が他の人間を仲間とすることができない, 人間同志の不和の状態を生み出すのである。同上

注11) 同上, p. 91

注12) 「労働生産物が商品形態をとったときに, いろいろな商品を生産する人間労働が質的に同じであるということが, 労働生産物が価値の対象化されたものとして同質であるという物的形態をとって現われ, また, 人間労働力の支出の時間の大小が, 労働生産物の価値の大小という物的形態をとり, 最後に生産者相互の社会的関係が, 労働生産物の社会的関係という物的形態をとる」(城塚登, 前掲書, p. 105) というように, 人間活動と人間の社会関係が物と化するのである。

注13) 物神的性格とは, 宗教において人間が自分の手で偶像をつくっておきながら, その自分の手につくったものを自分を越える存在であると思い込み, 拝んでいる状態をいう。このような錯覚による転倒が商品の場合にも見られるというのである。大塚久雄, 社会科学の方法—ヴェーバーとマルクス—, 24刷, 岩波新書, 1982, pp. 23-24およびK. マルクス, 資本論(一), エンゲルス編, 向坂逸郎訳, 17刷, 岩波書店, 1983, pp. 129-151

注14) 使用価値は道具的な価値であり, これは対象が商品に転化するための必要条件であるが, 商品としては対象は交換価値をもつだけであり, その交換価値は資本主義的社会のシステムの法則によって決定される。このように, ある生産物が商品になるとときには使用価値と交換価値は分離され, その結果, 商品の売り手と買い手との関係はもはや人間同志の関係ではなく, 物と物との関係となる。さらに

雇用者と労働者との間の結合は、人間は無で生産物がすべてであるとする態度に支配されるのである。こうなると、その本質においては自由であるべき人間労働は、その質を変えてしまい、もはや自由の余地がなくなってしまうのである。K. マルクス、資本論（一）、pp.67-128

注15) 剰余価値は剰余労働として現出し、剰余労働は剰余生産物として対象化される。この全体としての剰余生産物は剰余資本として現われ、それは一つの独立した自律的な交換価値を持つ存在として、生きた労働に対立しているのである。K. マルクス、資本論（二）、エンゲルス編、向坂逸郎訳、18刷、岩波書店、1983、pp.9-231

注16) 私有財産は、疎外された労働の必然的帰結として生じる。つまり疎外された労働による生産物は生産者には属さず、他の人間、すなわち生産過程を支配している人間に属する。さらにその労働者がより多く生産すればするほど彼はますます貧しくなり、彼の支配者は逆にますます豊かになり、その結果資本家の私有財産は増大する。私有財産が増大すれば、所有者の利益とは裏腹に労働者はますます非人間化されるのである。つまり、私有財産創造の理由のために疎外された労働が現われるとも言えるのである。K. マルクス、経済学・哲学草稿、pp.107-177

注17) H. マルクーゼ、エロスの文明、南博訳、紀伊國屋書店、1958、P.39

注18) E. フロム、正気の社会、加藤正明・佐藤隆夫訳、19刷、社会思想社、1974、pp.133-141

注19) R. カイヨワ、遊びと人間、清水幾太郎・霧生和夫訳、岩波書店、13刷、1979・Guttmann, A. From Ritual to Record : The Nature of Modern Sports. New York : Columbia University Press, 1978・竹之下休蔵、プレイ・スポーツ・体育論、7刷、大修館書店、1977・J. ホイジンガ、ホモ・ルーデンスー人類文化と遊戯一、高橋英夫訳、17刷、中央公論社、1971・Meier, V. K.

“On the Inadequacies of Sociological Definitions of Sport” .International Review of Sports Sociology, 16, 2, pp.72-102, 1981
・Suits, B. “What is a Game ?” in Sport and the Body : A Philosophical Symposium. 2nd edition, E. Gerber and W. Morgan (eds.), Philadelphia : Lea & Febiger, 1979, pp.11-17・Loy, J. W. Jr. “The Nature of Sport : A Definitional Effort” , Quest 10, pp.1-15, 1968らの考察から得られた。

注20) Rigauer, B. が引用している。前掲書、p. 57

注21) Brohm, Jean-Marie がこの表現を用いている。前掲書、p. 59

注22) Rigauer, B. op. cit. p. 71

注23) Lenk, H. Social Philosophy of Athletics. III : Stipes Pub. Co., 1979. p. 93

注24) Brohm, Jean-Marie, op. cit, p. 41

注25) 瀧澤克己著作集10-遊戯・芸術・宗教一、法蔵館、1974、pp.10-20

注26) Bannister, R. “The Meaning of Athletic Performance” in Sport and Society : An Anthology. J. Talamini and C. Page (eds.) . Little, Brown : 1973, pp. 328

注27) A. クレラ、マルクスの人間疎外論、藤野渉訳、3刷、岩波書店、1974、p. 240